

ヒグマワーキンググループの経過報告・今後の予定

1. 令和6年度ヒグマWGの開催概要

- ・第1回会議 令和6年8月6日（火）斜里町産業会館

2. 主な議事内容

知床半島ヒグマ管理計画に基づく管理の進捗状況やヒグマの出没状況を踏まえ、特に昨年度の大量出没及び捕殺により、知床半島第2期ヒグマ管理計画策定時に想定されていた個体数水準（生息数約450頭）とは個体群の状況が大きく変化しており、大量出没を踏まえて地域として今後どのような水準で管理していくかの考え方を中心に議論した。現時点の生息密度を自然遺産登録時の生息密度と同等とみなし、この水準を目安とする水準として管理するのはどうかとの提案がなされた。主な意見・指摘事項は以下のとおり。

■第2期知床半島ヒグマ管理計画の見直しについて

【計画の改訂に関して】

- ・現時点の生息密度を自然遺産登録時の生息密度と同等と判断するのは難しいのではないか。
- ・まずは大量出没後の生息状況の詳細（相対密度指標の動向や空間分布の変化）を把握することが重要であり、根拠となるデータが無いと計画改訂は難しいのではないか。
- ・捕獲数に基づく計算機実験によるシミュレーションだけでは不十分でこれとは独立した指標による長期的広域モニタリングデータとのクロスチェックが必要。
- ・地域連絡対策会議の意向も踏まえ今回提案のあった、昨年度の捕殺により大幅に低下した現状のヒグマの個体数水準を維持する考え方でOUVに抵触しないかは、モニタリングを行った上で改めて整理が必要ではないか。
- ・現状の捕獲体制の場合、目標値となる捕獲数を超過しても問題個体が発生すれば捕獲は行う。捕獲数に応じて狩猟自粛を呼びかける等の捕獲圧をコントロールできるような措置が伴う必要があるのではないか。
- ・地域住民や観光事業者、遺産地域利用者の声も踏まえた検討が必要ではないか。

【モニタリングの必要性】

- ・個体群動向の推定結果と併せて知床半島内での生息密度とその空間分布の動向を把握できるようなモニタリングが必要である。
- ・広域的DNA調査ができるとよいが、それに限定せず動態を把握できればよい。
- ・今年度より北海道大学と酪農学園大学の協働自主事業でカメラトラップを用いた広域のモニタリング調査を実施しているため、将来的にはこの調査の事業化を検討いた

だきたい。

- ・管理目標は軋轢の減少（危険事例発生件数低下）なので、単純な個体数よりも問題個体数の推定が重要ではないか。

⇒当日は方針が固まらなかったため、マーリングリスト等を活用して引き続き検討。

■現状に合わせた行動段階・ゾーニングの一部変更について

- ・知床財団案に対して、十分に議論する時間がなかったため、特段の意見なし。令和6年8月6日付けで変更。今後マーリングリスト等を活用して意見を募る。

■気候変動に対する順応的管理戦略について

- ・後日メールにて意見集約。

3. 令和6年度ヒグマWGに関する今後の予定

◆第2回ヒグマWG

令和6年12月（予定）

以上